

動詞の意味分析 ： 「はがす」と「むく」

著者	杉本 武
雑誌名	文藝言語研究. 言語篇
巻	47
ページ	33-43
発行年	2005-03-31
その他のタイトル	A Semantic Analysis of the Japanese Verb Hagasu and Muku
URL	http://hdl.handle.net/2241/9795

動詞の意味分析：「はがす」と「むく」

杉 本 武

1. はじめに

「はがす」と「むく」は、国立国語研究所（1964）で、それぞれ「はぐ」「むく」などとともに「2.1571 破壊・切断など」に、「脱ぐ」「はぐ」などとともに「2.113 包摂」に分類されている。また、国立国語研究所（2004）では、両語とも、「はぐ」などとともに「2.1560 接近・接触・隔離」に分類されている。両語は、いずれも、付着したものを分離するというような意味を表す類義語である。

(1) a. 木の皮をはがした。

b. 木の皮をむいた。

その一方で、置き換えが不可能な場合もある。

(2) a. ポスターをはがした。

b. ×ポスターをむいた。

(3) a. ×とうもろこしをはがした。

b. とうもろこしをむいた。

本稿では、両語の意味の記述を行う。なお、両語の類義語としては、前述のように「はぐ」もあり、先行研究でも、「はがす」「むく」とともに分析されている。しかしながら、「はぐ」は、対象が「皮」「爪」「布団」「着物」などに限られており、用法がかなり固定化しているようにみえるため、中心的な分析からは除外し、6. でふれるにとどめたい。

2. 辞書の記述

まずはじめに、両語が国語辞典においてどのように記述されているのかを見ておこう。

『国語大辞典』(小学館, 1981年)

はがす：付着している物をはいで離す。はぎ取る。めくり取る。はぐ。

むく：物の表面をおおっている皮、殻などを取り去り、中の物を外に出す。はぐ。はがす。へぐ。

『学研国語大辞典 第2版』(学習研究社, 1988年)

はがす：くっついているものを、めくり取る。はぎ取る。

むく：皮・殻など、おおいかぶさっているものをはがしとる。また、おおいかぶさっているものをとりさってあらわにする。

『大辞林 第2版』(三省堂, 1995年)

はがす：表面に付着している物やおおっている物を、めくりとる。はぎとる。

むく：外側をおおっているものを取り去る。

『新明解国語辞典 第5版』(三省堂, 1997年)

はがす：①表面に<張り(くっ)ついていた物や、本体をおおっていた物を、力を加えて取り除く。②〔何層かになっている物を〕操作を加えて、二つ以上に分離する。

むく：何かの表面を、薄く本体から分離する。

『岩波国語辞典 第6版』(岩波書店, 2000年)

はがす：本体に付いているもの、貼ってあるものを、そいだりめくったりするようにして離す。

むく：内側の物を取り出すため、また、内側の物を現すために、それをおおっている外側の物を(はがし)取り去る。

『明鏡』(大修館書店, 2003年)

はがす：表面の物がとれて離れるようにする。はがれるようにする。

はぐ。▷「はぐ」に似るが、「むく」は中身をあらわにすることに注目するという。

むく：①表面をおおっているものを取り去る。②〔慣用句的に〕目や歯などをむき出しにする。

各辞書で、「はがす」「むく」「はぐ」の言い換えによる記述も多いが、特徴的な点もある。それは、対象に関する記述として、「はがす」においては「付着しているもの」という記述が、「むく」においては「おおっている(おおいかぶさっている)もの」という記述が見られることである。この点から、「はがす」と「むく」の違いが対象の違いとして記述されていると解することもで

きよう。

3. 先行研究の記述

まとまった形で「はがす」「むく」を記述したものとしては、坂東（1979）がある。坂東（1979）は、「はぐ」「はがす」「むく」の3語について、高知県高岡郡佐川町方言と共通語を比較しつつ分析したものであるが、共通語の「はがす」「むく」については、以下のように記述している。

「はがす」：密着してくっついている状態のものを本体から引き離す行為。

「むく」：力をあまり入れずに本体をおおっている対象物を除去し、中身を取り出す行為。

（坂東（1979：38））

ここでも、多少用語は異なるが、辞書の記述と同様、「密着してくっついている状態のもの」と「本体をおおっている対象物」という、対象の違いとして記述されている。また、「引き離す行為」と「中身を取り出す行為」という、動作の様態の違いとしても記述されている。

この他にも、国立国語研究所（1972）、柴田他（1976）にも記述があるが、各語の記述をまとまった形で示していないため、これらについては随時言及する。

4. 分析

4. 1. 動作の主体と手段

「はがす」も「むく」も、通常、主語として人間および動物をとることができる。

- (4) a. 太郎が木の皮をはがした。
- b. 花子がりんごの皮をむいた。
- (5) a. 熊が木の皮をはがした。
- b. 猿がバナナの皮をむいた。

柴田他（1976：142 f.）では、主体に関する記述は見られないが、手段に関して、「これらの動詞が表わす行為は、指先か手が手段になると述べたが、包丁・ナイフなどの道具を使うこともある」と述べている。したがって、主体は、人間および手のある動物ということになるが、次の例のように、手段は手、ま

たは手で用いる道具には限らない。

- (6) a. 鳥がくちばしで木の皮をはがした。
- b. 鳥がくちばしでみかんの皮をむいた。
- (7) a. 太郎は器用に足の指ですねの絆創膏をはがした。
- b. 太郎は器用に足の指でバナナの皮をむいた。

したがって、「はが」したり「むい」たりする動作が可能であれば、どのような手段を用いてもかまわないものと考えられる。

また、このことから、「はがす」「むく」の主体は人間ないしは動物でなければならないが、手段に制限がないため、このような動作を行えるような動物であればよいことになり、主体について人間および動物という以上の記述は必要ないであろう。

4. 2. 動作の対象

「はがす」と「むく」では、1.でも挙げたように、同じ名詞句を目的語としてとることもできるが、異なりも存在する。まず、大きな違いとして挙げられるのは、対象としてとる名詞句の役割の違いである。

- (8) a. みかんの薄皮をはがして、食べた。
- b. みかんの薄皮をむいて、食べた。
- (9) a. ×みかんをはがして、食べた。
- b. みかんをむいて、食べた。
- (10) a. 銅線の被覆をはがした。
- b. 銅線の被覆をむいた。
- (11) a. ×銅線をはがした。
- b. 銅線をむいた。

ここで便宜上、付着した二つの物体を本体と付着物とに分けて捉えると⁽¹¹⁾、「みかん」「銅線」が本体、「みかんの薄皮」「銅線の被覆」が付着物となる⁽¹²⁾。この時、「はがす」の場合、目的語として付着物「みかんの薄皮」「銅線の被覆」しかとることができないが、「むく」の場合、付着物も本体「みかん」「銅線」もどちらもとることができる。

これに対して、次のような例を見てみよう。

- (12) a. くっついてしまった紙をはがした。
- b. ×くっついてしまった紙をむいた。
- (13) a. 癒着した組織をはがした。

b. ×癒着した組織をむいた。

これらの例では、2枚の「紙」や二つの「組織」は、どちらが主で、どちらが従ということではなく、先の本体と付着物という関係にはないと考えられる。つまり、本体と付着物の区別のない、単に付着した二つの物体を分離した状態にするという動作の場合には、「はがす」は使えるが、「むく」は使えないことがわかる。

これについては、国立国語研究所(1972:79)でも、次のような例を挙げて、「はがす」の重点が、とり去ることよりも、密着したものをひきはなす点にある、ということである」と指摘されている。

(14) その胎盤を剥離して行くと、ところどころ石灰性の癒着と思はれるような箇所がある。そこを剥がさうとしてみると、(本日休診97)

しかし、国立国語研究所(1972)は、その前の部分で、「やはり本来的でなく、しかも本体に密着しているものをとり去るのである(p.79)」とも述べている。この二つの記述は矛盾しており、「はがす」の場合、本体と付着物(国立国語研究所(1972)では「本体に密着しているもの」との区別は必要ないと考えられる。また、坂東(1978)でも、「はがす」の記述として「本体」という用語を用いているが、これも同様である。もちろん、「みかんの薄皮」のような対象の場合、一見、本体と付着物の区別があるようにも見えるが、これは対象自体に存在する性質であって、「はがす」の意味記述としては必要ないのである。

次に注目すべきは、従来の研究で、「むく」の場合、「おおっている」ものを取り除き、中のものを「あらわにする」というような記述がされている点である。まず、「付着物が本体をおおっている」という特徴は必要なのであろうか。

(15) ?みかんの筋をむいた。

(16) 腕のかさぶたをむいた。

確かに、付着物が本体をおおっていないような場合、「むく」は若干使いにくいようであるが、完全に不適格とも言えないであろう。したがって、先のような特徴が「むく」にあるとまでしてしまうことには問題があるであろう。この点を考えると、必要な特徴は「付着物を取り除き、本体を取り出す」というものではないかと考えられる。「本体を取り出す」という行為の前提としては、通常、「付着物が本体をおおっている」ことが想定しやすいということではないだろうか。これについては、4.3.で再び取り上げる。

ところが、以上のような特徴だけでは、次のような例は説明できない。

(17) a. ×腕のむだ毛をはがした。

b. ×腕のむだ毛をむいた。

(18) a. ×足のいぼをはがした。

b. ×足のいぼをむいた。

これらの例の対象は、二つのものが付着したものであるが、不適格になる。これまで見た適格な例と、これらの例の違いは、付着が面的なものか点的なものかという違いであろう。したがって、「はがす」と「むく」の両語の対象には、「面的に付着したもの」という特徴が必要であると考えられる。なお、国立国語研究所(1972)は、「むく」に関して、「あるものの表面に近いところに、うすくある、という点では範囲が限られている (p.79)」と述べている。「面的に付着したもの」という以上に、「薄く」というような特徴が必要であるかどうかは、明らかではないが、「面的」と捉えられるためには、ある程度「薄い」ものであることが必要になるのではないだろうか。

また、次のような例が不適格なのはなぜであろうか。

(19) a. 壁のポスターをはがした。

b. ×壁のポスターをむいた。

(20) a. 壁紙をはがした。

b. ×壁紙をむいた。

(21) a. 絆創膏をはがした。

b. ×絆創膏をむいた。

もともと、「むく」は国立国語研究所(1972)で「むくは対象の範囲がかなりせまい (p.79)」とされているように、対象としてとるものが限られる。柴田他(1976:144)は、「むく」の対象となるものとして、次のようなものを挙げている。

- ①木の皮など、
- ②芋、玉ねぎ・豆などの野菜や、りんご・栗などの果物の表皮、
- ③ゆで卵・貝の殻、
- ④指・ひざの皮、
- ⑤キャラメル、鮭を包んだ笹の葉、
- ⑥歯・目(玉)

これからわかるのは、「むく」の対象になるのは、もっぱら「皮」「殻」の類であることである。これは、「本体と付着物がもともと一体化しているもの」とあると考えられる⁹⁾。したがって、先の「ポスター」「壁紙」「絆創膏」などは、

本体と付着物が一体化しているものとは捉えられないため、不適格になると考えられる。なお、次の例の適格性の違いは、一体化と捉えられる度合いの違いによると考えられる。

(22) ?ガムの包み紙をむいた。

(23) ×プレゼントのラッピングをむいた。

以上をまとめると、「はがす」と「むく」の対象の特徴は以下ようになる。

「はがす」：二つのものが面的に付着したもの

「むく」：本体と面的な付着物がもともと一体化しているもの。

4. 3. 動作の様態

まず、柴田他（1976）では、「行為それ自身」について次のように述べている。

ハガスとハグは、本体から完全に分離・除去する行為で、焦点は〈除去する〉ことにある。これに対して、ムクは、本体からの分離は不完全でもよく、ポイントは〈本体（中身）を取り出す〉ことにある。

（柴田他（1976：140））

「むく」については、3.でも見たように、坂東（1979：38）でも「中身を取り出す行為」という記述がみられる。

まず、「はがす」について、「除去する」というような特徴が必要かどうかである。次の文を見てみよう。

(24) 投函しなかった手紙から切手をはがした。

(25) 木の皮をはがして、材料にした。

これらの場合、分離されたものは不要なものでなく、むしろそれを利用することを目的としている。したがって、「除去する」というような特徴はないと考えられる。

一方、「むく」の場合はどうか。

(26) ×貝の殻をむいて、皿にした。

(27) ×ガムの包み紙をむいて、折り紙を作った。

これらは、主節の行為の材料として付着物を使うということを意図した文であるが、不適格になる。このことから、「むく」は、付着物ではなく本体に注目すると考えられ⁽⁴⁾、「むく」には「本体を取り出す」という特徴が必要になる。

「むく」のこのような特徴は、「むき出し」のような複合名詞の成立にも関係していると思われる。

4.2.で、「むく」の場合、「本体をおおっている」という特徴が必要であるかどうかという点にふれたが、以上のことから考えると、「本体を取り出す」ということから、行為以前においては、「取り出されていない」つまり「おおわれている」という含意が生じるのではないかと考えられる。さらにこの点から言うと、「むく」の特徴は、「本体を取り出す」と記述するよりも、「本体をあらわな状態にする」と記述した方が妥当であると考えられる。柴田他(1976)も言うように「本体からの分離は不完全でもよく (p.140)」⁵⁾、例えば次の例の場合、「むい」ても必ずしも「取り出さ」れるわけではないであろう。

(28) バナナの皮を(半分まで)むいた。

それでは、「はがす」の動作はどのように考えられるのであろうか。ここで、注目されるのは、「はがす」と「むく」の構文の違いである。

(29) a. 木の皮をはがした。

b. 木から皮をはがした。

(30) a. 壁のポスターをはがした。

b. 壁からポスターをはがした。

(31) a. 木の皮をむいた。

b. ×木から皮をむいた。

(32) a. 腕のかさぶたをむいた。

b. ×腕からかさぶたをむいた。

坂東(1979:37 f.)で指摘されているように、「はがす」の場合は、本体をカラ格で、付着物をヲ格で示すことができるが、「むく」の場合にはできない。これは、「はがす」には移動が含まれるが、「むく」には移動が含まれないということを示しているのではないかと考えられる。したがって、「はがす」の動作は、「一方を移動し、分離した状態にする」ということであると考えられる。

次に、柴田他(1976)では、「行為に伴う抵抗」として、次のようなことが述べられている。

ムクもこの点は同じで、「するする」と動かせるような、〈無理のない〉行為である。これらに対して、ハガスは、「ひと思いに」しないと困るような、〈多少無理の伴う〉、しかし、やり方によっては難なくできる行為である。
(柴田他(1976:141))

そして、これについて、次のような例を挙げている。

(33) つやのある、すこしぬめって水気のあるところへ目ぼしをつけて爪をたて、本体からはがすようにすると、クワの枝はスリとむけていくの

であった。(国分一太郎『しなやかさというたからもの』晶文社 p.100)

- (34) いま、私たちの前に行く、そのちょっとばかり秘密めかしいものを持った平凡な中年男は、やがて過去から未来にわたって、くるりと皮をむかれ、何から何までをむきだしにされてしまうのだ。それを思うと、私は自分の皮がはがされるような痛みを感じる。(阿部公房『第四間水期』新潮文庫 p.41)

まず、(33)では、「むく」ではなく、自動詞の「むける」が使われているので、これをそのまま「むく」の議論に使うことはできないであろう。実際、次のような例は不自然である。

- (35) ?クワの枝をするとむいた。

(34)も、「痛みを感じる」と言っても、あくまでも『自分の皮がはがされる』という、対象（この場合、受動主語）に関する知識に基づくものであり、これも議論としては妥当ではないだろう。したがって、「むく」「はがす」に関して、「無理のない」「無理を伴う」のような特徴は必要はないと考えられる⁽⁶⁾。

以上をまとめると、「はがす」と「むく」の動作の様態の特徴は以下のようになる。

「はがす」：本体をあらわな状態にする。

「むく」：一方を移動し、分離した状態にする。

5. 派生的用法

「むく」には、次のような派生的用法がある。

- (36) 目をむいた。

- (37) 歯をむいた。

これらは、目や歯をあらわにして感情を表現する様を表している。この場合の本体に相当するのは「目」「歯」、付着物に相当するのは「まぶた」「唇」であるが、これらは、必ずしも一体のものとは考えられない。これは、「もともと一体のものである」という特徴が抑圧されて、「本体をあらわな状態にする」という意味で使われているものと考えられる。この点からも、前節で述べた、「むく」には「本体をあらわな状態にする」という特徴が必要であるということが根拠づけられるであろう。

6. 「はぐ」との関係

「はぐ」について、柴田他（1976）は「しかし、ハグは、〈全体の一部としての表面〉を分離することである。ムクは、この点でハグと変わらない(p.147)」としている。したがって、次の文は不適格である。

(38) ×癒着した組織をはいだ。

これは、「むく」と同様、「はぐ」の場合も本体と付着物という区別が必要になるということであるが、形態的に似た「はがす」とは異なった特徴を持つという点で興味深い。しかしながら、次のように、「むく」とは異なり、「はぐ」は、付着物ではなく本体に注目するとは言えず、この点では「はがす」に近い(4.3.の(24)~(27)の例を参照されたい)。

(39) 木の皮をはいで、材料にした。

(40) 子供の布団をはいで、干した。

これらの点からは、「はぐ」は「はがす」と「むく」の中間的な性格を持っていると言えよう。

また、「はぐ」と他の2語との違いに関しては、坂東（1979）で「「はぐ・はがす・むく」の三語を考えた場合、行為に伴う力は、はぐ>はがす>むくの順に、「はぐ」が一番大きく、「むく」が一番小さい(p.38)」、柴田他（1976）で「ハグは、「力を入れて」するほどの、〈無理矢理に〉分離する行為である(p.141)」とされており、「加えられる力」の観点から記述がなされている。これは、「はぐ」の対象の制限と関連すると思われる。柴田他（1976:144）では、「はぐ」の対象となるものとして、次のようなものを挙げている。

①カニやエビの殻、

②木の皮・動物の皮・頭の皮、

③布団・着物、

④官位など

これらは、いずれも、本体と付着物の分離に抵抗を伴うものである。したがって、次のような、「皮」であっても分離に抵抗の伴わないものを対象にすることはできない。

(41) ×みかんの皮をはいだ。

このような現象を、本体と付着物の関係の点から記述するか、動作の際に加えられる力の点から記述するか、用例が限られることもあって、明らかではない。

7. おわりに

以上をまとめると、「はがす」「むく」の意味は次のように記述される。

「はがす」：人間や動物が、面的に付着したものの一方を移動し、分離した状態にする。

「むく」：人間や動物が、本体から面的な付着物を分離し、本体をあらわな状態にする。ただし、本体と付着物は一体のものと捉えられるようなものでなければならない。

このように、「はがす」と「むく」の違いは、その対象だけにあるのではなく、その動作の様態にもあることが明らかになった。ただし、この両者は関連するものであり、「はがす」の場合、本体と付着物の区別がないため、その動作は分離になるのであり、「むく」の場合、本体と付着物が区別されるため、その一方の本体に注目するのである⁷⁾。

注

- (1) 本体と付着物という区別が記述上必要であるかどうかについては後述する。
また、先行研究等ではしばしば「密着」という用語が使われているが、特に「密着」とする必要性が見出せないため、本稿では「付着」という用語を用いる。
- (2) あるいは、「みかん」「銅線」は本体と付着物の全体を指していると言うべきかもしれない。
- (3) 柴田他（1976）は、「〈本体の一部としての表面〉（p.147）」としている。
- (4) 柴田他（1976）は「焦点」という用語を用いているが、文法上用いられる用語でもあり、必ずしも適切であるとは言えないため、本稿では「注目する」という用語を用いる。
- (5) ただし、柴田他（1976）は、これに関する例は挙げていないので、28の例がその意図に沿ったものであるかどうかは不明である。
- (6) ただし、柴田他（1976）では、同時に「はぐ」も比較しており、「はぐ」の場合には、何らかの「力」に関する特徴は必要ではないかと考えられる。
- (7) 「はぐ」の場合も、本体と付着物が区別されるが、「むく」と異なり、もう一方の付着物に注目することもできる。

参考文献

- 国立国語研究所（1964）『分類語彙表』，秀英出版
 国立国語研究所（1972）『動詞の意味・用法の記述的研究』，秀英出版
 国立国語研究所（2004）『分類語彙表——増補改訂版——』，大日本図書
 柴田武・國廣哲彌・長嶋善郎・山田進（1976）『ことばの意味』，平凡社
 坂東多衣子（1979）「はぐ・はがす・むく」，『日本語研究』2，pp.35-39，東京都立大学